

「海の生命線」と称された島々で、多数の沖縄県人を含む日本人移民は、原野を拓き、産業を興し、約十万人の町を築いた。

彼らが夢見た新天地は、やがて激しい地上戦の末に焦土と化し、消滅に至る。しかし、そこには決して忘れてはいけない人々の歴史と生活が在った。

**戦前期ミクロネシア文化圏で刊行された
唯一の総合文化雑誌、待望の復刻**

南洋群島文化協会機関誌

全26巻+別冊1

南洋群島

1935年～1943年

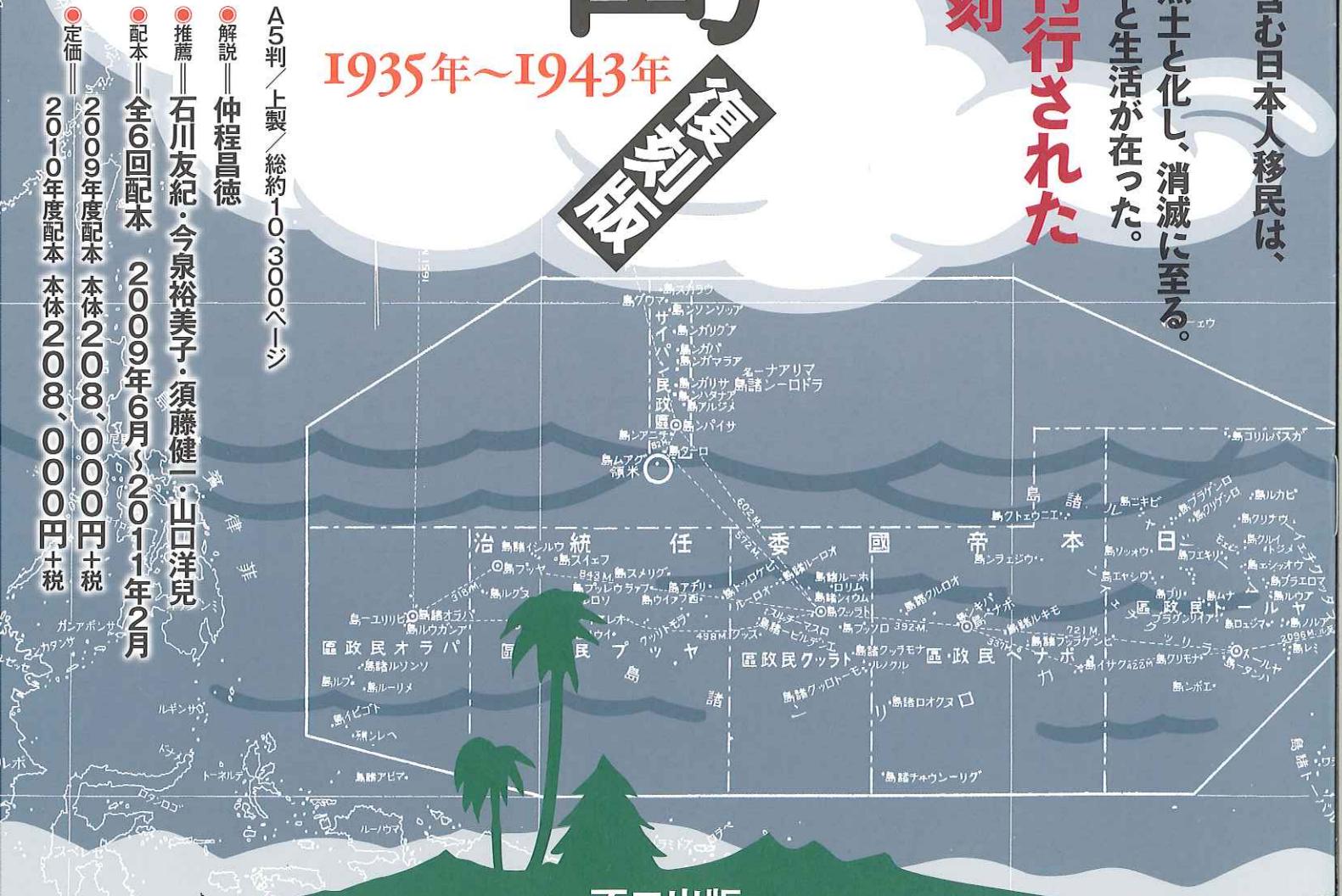
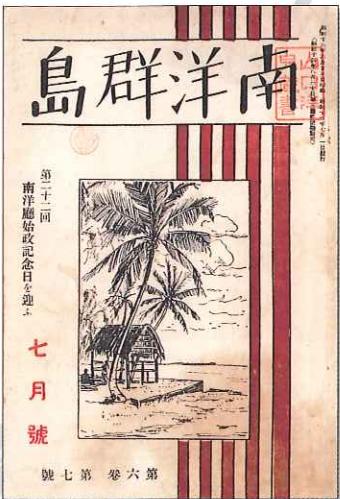
復刻版

A5判／上製／総約10,300ページ

●解説＝仲程昌徳

●推薦＝石川友紀・今泉裕美子・須藤健一・山口洋兒

●定価＝2,009年度配本 全6回配本 2009年6月～2011年2月
2,008,000円+税
2010年度配本 本体208,000円+税



不二出版

內容見本

復刻にあたって

協会南洋群島支部、第九巻第七号からは南洋群島協会の機関誌であり、創刊号は一九三五（昭和二〇）年一月に刊行された。発行所は南洋群島パラオ南洋庁内の南洋協会南洋群島支部、編集は東京の南洋庁東京出張事務所内、編集兼発行人は横田武、印刷人は青田伊祐。創刊当初は印刷機の不備などにより東京での出版であったが、二年半後の一九三七（昭和一二）年七月発行の第三巻第七号からは発行、編集、印刷などすべての業務がパラオ・コロールに移管され、南洋群島を代表する文化雑誌として発展していった。

日本の国外における動向を知る上で大切な雑誌であり、この南方の委任統治領で日本人がいかなる生活をしていたかを具体的に知る上で最も貴重な資料である。誌面には南洋庁長官などの論説や視察記事、経済・産業や民族・民俗に関する研究報告、中島敦などが寄稿した隨筆・紀行文に加えて日本人移民たちの優れた文芸作品なども掲載されている。また、雑録欄においては南洋群島各島の出来事が詳細に報告されており、移住した日本人や島民の日常生活の一端を窺い知ることも可能である。

までの総約百冊中、九五冊が確認されている。旧南洋群島はかつて「海の生命線」と呼称された島々であり、多数の沖縄県人を含む日本人移民たちは、原野を開拓して、製糖業を中心に各種の産業を興し、昭和一八年には約十万人の町を築き上げていた。しかし彼らが夢見た新天地は一九四四（昭和十九）年、米軍との激しい地上戦の末に焦土と化し、日本軍兵士や多くの民間人が犠牲になった。決して忘れてはならない歴史であろう。

昭和十年代の日本人移民の活動実態を映す資料として復刻
する次第である。

不二出版

鳥 群 連 標

第一號 刊創 卷一 第



旅の手帖から

三

好
四

四

はじめは水平線上に横たはつた一本の線。

トロリと田舎の脂を流したやうな朝風
の海上に浮かんだ、ヤルート環礁の最初
の皆見である。

シヤボールは小綺麗な島だ。砂の上
の上に木々や屋根が見分けられてく
る。やがて船が近づくにつれて、その線
の間に木々や屋根が見分けられてい
る。

土地の人々に怪訝な顔をされた。ヤル
ートをいいなどと言ふ人は滅多にな
いさうだ。土地の人自身もいわ
つてゐないさうである。勿論、それは思
生活上の不便といふ點に就いていふの
であらう。さういふ意味で、内地の小
都會の場末然たるコローヤガラバハ
の生活が諂ひながられてゐるかも知

卷頭に宣

大正十年一月二十日、わが國際聯説聯脱の効力の發生を焦眉の間に控へて、雑誌「南洋風雲」は群島の聲を擧げた。吾等は更にと新しくその發生の所以を序し、その創刊の趣旨を説く必要を認めよ。何とならば、本誌の誕生は、南洋廳主領事部協議の結果ではあつても、事發ことにして至らしめたるものは、即ち演説として押し寄せる群島官民の實に對して將來を爲すべきか、群島の附屬にからである。群島在住の官民は、群島に對して將來を爲すべきか、群島の附屬にからである。吾等の聲であるかは、南洋發展の先駆者たる諸君が、何人よりも最も痛切に體験し感得して居られる所である。本誌の創刊は、實にこの諸君の夙に觀じ決意せられる處を以つて、全幅の使命となし目と/or>するものであるが故に、本誌は取りもほさず諸君の内にあるものゝ高揚であり具現である。現在及び將來、吾等の成すべきことは枚舉に達がない。ことに本年はその發展に一鷗を劃する最高意義あり記念すべき年である。この年を期し、吾等は過去の掲籃を振り棄て、青年群島の新しき氣氛を以つて群島の文化經濟の向上發展に努め、且つこれを飛石とし踏臺として南方未聞の新天地を活躍すべきであるが、本誌は實にこの秋に際して雄々しくも産婆をあげたのであるから、その使命は愈々重く、その前途は益々洋洋たりである。少くとも、本誌は群島三萬の官民を背景とし、その結合の楔となり、好伴侶となり、パイロットとなつて、群島開明の途上に航さんとするものである。いざ船は繩を斷つた。吾等は敢て前途の安穩を祈らず、難航の苦修を恐れず、只願はくは苦難をして百難を突破するの意氣と力を失はしむること勿れ。然らば吾等の運命は活達として自ら打ち抜け、遠からずして絢爛たる群島文化の殿堂を建設し得るに至らであらう。

大正十年一月二十日、わが國際聯説聯脱の効力の發生を焦眉の間に控へて、雑誌「南洋風雲」は群島の聲を擧げた。吾等は更にと新しくその發生の所以を序し、その創刊の趣旨を説く必要を認めよ。何とならば、本誌の誕生は、南洋廳主領事部協議の結果ではあつても、事發じこに至らしめたものは、即ち演説として押し寄せる群島官民の實に對する憂患の間に控へて、雑誌「南洋風雲」は群島在住の官民は、群島に對して將來を爲すべきか、羣島の附屬となるわが帝國への使命は何であるかは、南洋發展の先駆者として奮闘する諸君が、何人よりも最も痛切に體験し感得して居られる所である。本誌の創刊は、實にこの諸君の夙に觀じ決意せられる處を以つて、全幅の使命となし目と/or>するものであるが故に、本誌は取りもほさず諸君の内にあるものゝ高揚であり具現である。現在及び將來、吾等の成すべきことは枚舉に逃がない。ことに本年はその發展に一鷗を劃する最高意義あり記念すべき年である。この年を期し、吾等は過去の搔籠を振り棄て、青年群島の新しき氣氛を以つて群島の文化經濟の向上發展に努め、且つこれを飛石とし踏臺として南方未聞の新天地を活躍すべきであるが、本誌は實にこの秋に際して雄々しくも産聲をあげたのであるから、その使命は愈々重く、その前途は益々洋洋たりである。少くとも、本誌は群島三萬の官民を背景とし、その結合の楔となり、好伴侶となり、パイロットとなつて、群島開明の途上に航さんとするものである。いざ船は繩を斷つた。吾等は敢て前途の安穩を祈らず、難航の苦慘を恐れず、只願はくは苦難をして百難を突破するの意氣と力を失はしむること勿れ。然らば吾等の運命は活達として自ら打ち抜け、遠からずして絢爛たる群島文化の殿堂を建設し得るに至らであらう。

不
一
出
版

不
一
出
版

サイパン法院正面



サイパン郵便



サイパン医院正



—南洋群島創刊號目次—

A black and white photograph capturing a bustling street scene in Naha, Okinawa. The view is from a low angle, looking down a wide, paved road. On the left, a large, two-story building with multiple arched doorways and windows stands prominently. A flag is flying from a pole on its roofline. Several people are gathered near the entrance, some holding umbrellas. In the center of the street, a man in a light-colored uniform stands near a group of bicycles. Further down the road, a horse-drawn carriage is visible. To the right, a row of buildings with arched roofs runs parallel to the street. A tall utility pole with multiple wires stands on the right side. Streetlights are mounted on poles along the sidewalk. The overall atmosphere is one of a busy, everyday scene from the early 20th century.



南洋	ミニの波音	蓮見車郎	西島
隨筆	マーシャルの眼	不染	見
南洋と國防	カナカの眼	生	勉
委任統治と列強	海軍大將末次信正	死	大
戸を閉すグラム	大友湖三郎	泰	安
統治の根本は何か	堀瀬満郎	泰	吉
わが南洋と海洋少年	前南洋監督官長	泰	吉
南洋の旅を感じたこと	國長海軍少佐	泰	吉
世界展望	能仲道滿	泰	吉
政界展望	藤文太郎	泰	吉
和歌五題	清夫	泰	吉
南洋を描く	山一郎	泰	吉
明朗と熱情	鶴透郎	泰	吉
捕民地の女	松田透	泰	吉
上向ひて草す	橋田透	泰	吉
まだ見ぬ	北見志保子	泰	吉

映画	久遠の誓ひ	利根の川霧	物語	久遠の誓ひ
入江新作狂歌二段目	久遠の誓ひ	久遠の誓ひ	久遠の誓ひ	久遠の誓ひ
南洋群島の映画を見る	久遠の誓ひ	久遠の誓ひ	久遠の誓ひ	久遠の誓ひ
日本狂歌二段目	久遠の誓ひ	久遠の誓ひ	久遠の誓ひ	久遠の誓ひ
内地と私	久遠の誓ひ	久遠の誓ひ	久遠の誓ひ	久遠の誓ひ
米機の太平洋横断	久遠の誓ひ	久遠の誓ひ	久遠の誓ひ	久遠の誓ひ
元	久遠の誓ひ	久遠の誓ひ	久遠の誓ひ	久遠の誓ひ

戦前期南洋群島における日本人移民の実態が明らかに

石川友紀（琉球大学名誉教授）

戦後、かつて日本の領土とされた南洋群島を始め、満洲・

台湾・樺太などの植民地の研究は一時タブー視されてきた。近年、同地域の研究も比較的増加し、その内容も戦争体験のみならず多様化し、学術研究も蓄積されてきている。

南洋群島とは現在の北マリアナ連邦、パラオ共和国、ミクロネシア連邦、マーシャル諸島共和国の太平洋上に広がるミクロネシア地域である。日本統治時代はサイパン、テニアン、ロタ、ヤップ、パラオ、トラック、ボナペ、ヤルートの六支庁が置かれていた。今回復刻の雑誌『南洋群島』ではサイパン、テニアン、ロタ、ヤップ、パラオ、トラック、夏島、ボナペ、クサイ、ヤルートなどの島々において、昭和二〇年代日本人移民の歴史と実態が明らかにされる。すなわち、同島嶼地域の自然・地理・歴史はもちろんのこと、政治・経済・産業（農業、水産業など）・社会・生活史など・文化（文学、宗教、民俗、映画、写真、スポーツなど）・教育・交通などについて詳細な情報が得られるのである。

このような貴重な雑誌は、これまで図書館などで検索を通してしかみることができなかつた。今回印刷物として入手できることは、移民の基礎研究の資料としてのみならず、戦前期南洋群島で活躍した日本人移民の過去の出来事を通して、その光と影を浮き上がらせることにもなり、日本の南進政策の一端を垣間見ることができる。忘れ去られゆくオセアニアの旧南洋群島に関心を持つていただきたく、本復刻版の購入を推薦いたします。

『南洋群島』の現在的意味

須藤健一

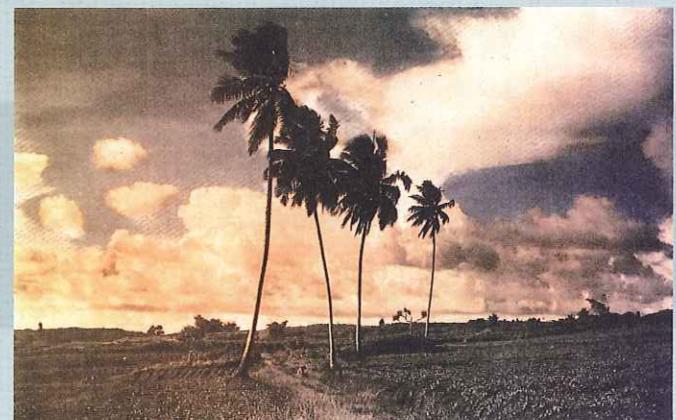
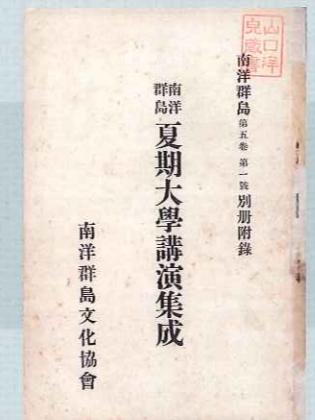
（国立民族学博物館館長）

ミクロネシアの島々に「六万人もの日本人が「住んで」いた。民間人は約九・五万人であとは軍人である。このような日本の南洋群島への進出・侵略の歴史は、過去のことだけでなく歴史の舞台にもまことに取り上げられなかつたといつてよいだらう。

一九三三年に始まる国際連盟の委任統治領としての日本統治は、「島民の福祉増進」を最優先した点で、当初世界の植民史上、最も優れた「支配」と評価されている。しかし、国際連盟の資源開発を利用する。そして、島の人びとには「皇民化教育」を強め、島々を軍事基地化する。昭和二〇（一九三五）年には、島民人口を凌ぐ五万人もの日本人が、農業、漁業、鉱業、製糖、運輸、サービス業として役人などあらゆる職業に従事した。

この日本人の南洋進出期に、邦人向けの総合月刊誌として刊行されたのが『南洋群島』である。この雑誌は、統治政策、時局、植生、環境、産業、現地生活、隨筆、詩歌から學術情報まで掲載している。これまで、南洋群島における日本人の生き様についての総合的な歴史研究は十分とは言いがたい。それは、終戦時に戸籍や土地台帳など「重要な」記録書類が焼却ないし埋没されることによる。多くの書かれた記録が失われた南洋群島の歴史を今、日本人の活動実態として私たちに教えてくれるのがこの雑誌『南洋群島』である。

『南洋群島』誌の復刊は、ミクロネシアの人びとこれわれわれ日本人とのあらたな関係を二二世紀に展開するうえで「生き証人」の役割を果たすことになる。



パラオ産業試験場付近の風景

古雑誌収集の困難と楽しみ

山口洋児

（株）アジア太平洋資料室長）

ミクロネシア（旧日本統治下南洋群島）の文献資料の収集を始めたから、四十年以上がたってしまった。

祖父の代（大正三年）からサイパン島に住みつき、私自身はそこで生まれ、小学校一年生まで－サイパン、ロタ、テニアンなどの島々に玉碎寸前まで暮らせた。

南の島への郷愁から、何とはなしに始めた資料などのコレクションだったが、すっかりのめり込んでしまった。当時は旧南洋群島などに興味を持って下さる方もなく、古本屋でも棚のすみにホコリにまみれて突っ込まれていた。

収集しているうちに、入手が非常に難しいものがあるのに気がついた。

古本などは比較的簡単に入手できたが、現地で発行された雑誌、新聞、パンフレットなどは誠に入手が難しく、大学図書館の係員にたずねても首をかしげられ、それならばと集めた古書の著者の先生方がおられた大学を一軒一軒たずねヨーロッパ、アメリカ、オーストラリアの古書店も歩いてみたが、見当たらなかつた。半分あきらめかけていたころにのぞいてみた東大前の古書店であった。創刊号を含むホコリだらけのおよそ二十冊を大喜びで胸に抱いて帰つて来た。

雑誌『南洋群島』には他の資料には出ていない明治期の日本と南の島々の話や、太平洋貿易の話、日本統治下時代の二〇万人近い移民の情報、人々の文化、美術と、今となっては消えてしまった情報が沢山。之は絶対、目を通さなければならないし、今は亡き人の話、フォーカストーリー、文芸、美術など目がはなせない。太平洋史に興味のある方は絶対目をとおすべきだろう。古い主方久功氏や中島敦氏や政治家、軍人にも会えるだろう。楽しみなことである。

「海の生命線」の実態を明らかに

今泉裕美子（法政大学教員）

近年、日本の南洋群島統治に関する未公刊文書が国内外で発掘され、マイクロ化や復刻も始まって南洋群島研究はその条件を整えつつある。聴き取りに取り組む研究も少くないが、現在取材可能なインフォントの大半は戦時に十歳前後であり、情報は制約をもたらすをえない。現地の新聞、例えば『南洋毎日新聞』（サイパン）『南洋新報』（パラオ）は、現在確認できるのは一九四二～四年発行のもので、南洋群島が「絶対国防圏」の内と外に分断され、米軍侵攻を目前に控えた兵站基地化を急ぐ時期に限定される。

本誌は、日本が国際連盟からの正式脱退（一九三五年三月）の「効力発生を焦眉に控へて」創刊された。日本が脱退を通告した一九三三年頃から、政財界では「海の生命線＝南洋群島」なるスローガンが声高に叫ばれ、南洋群島が日本の経済上、国防上の「生命線」などの意識を国民に喚起せんとする動きが始まっていた。その動きを現場から、また現場の人々に促そうとしたのが本誌である。発行した南洋協会南洋群島支部や南洋群島文化協会には、南洋庁長官はじめ現地政府の有力者が多く参加し、編集には政策的な意図が大きく反映されて政策研究・提言、これに関わる国際情勢の情報が主軸となる。しかし総力戦体制構築が急務となる時期までの誌面には、娛樂に乏しい住民向けに、当時内地で流行った歌謡曲、演劇、映画、小説などの紹介もある。料亭や現地住民の性風俗に関する記事、「ミス・グントウ」等の写真には、「生命線」を叫んだ男性たちのいまひとつの関心も垣間見られよう。更にゴシップ、南洋庁施政への不満や批判、スポーツ対抗試合情報、川柳、短歌、商店広告などには、翼賛体制下に管理・統制の対象となつたであろう人々のくらしや意識を窺い知ることができる。

日本の南洋群島政策と現地社会、人々のくらしとの関係が、本誌の活用を通じてより深い分析を生み出すことに期待したい。

內容見本

「こちよ、いて陽氣で輕はづみなバラオ人の踊——ルクは調子の低い、静かな處處か感度な感じさへある踊であります。ルクは二つの部に分れ、最初に序曲的に踊られる静かな短いもの——是れは普通ヘリタツクリラ・ルク (Heltakla ra Ruk)——「Ruk 韻」の意) と云はれます——と後で躍るれる、クロウ・ル・ルク(或はア・デラル・ア・ルク) Krou el Ruk——a Delal a Ruk—共に「大ルク」の意) とあります。共に神歌でありましてバラオ人は神様がついたものであると云ひますが、歌謡の部で譯して置きました様に、神事を歌つたものではありますね。(ヘリタツクリ・ラルクの方は始めから皆立つ踊るもので、右手にレバヅ、左手にハウスを握つて——レバヅは灰石入れた竹筒であります——現在では右手上に刀の様な木器或は短い棒もありますが、左手上には長い棒をもつて踊られます)。前部前向、前部右向と云ふ風なと、中央二組に別れ向ひ合つて踊るものとあります。クロウ・ル・ルクの方は始め全部前向で躍つて居つて、ガーデル (Dereuder) と云はれる序曲的なものの中まで一齊に立上つて踊り出します。之は持物はありませんが、それが本来のルクであると思はれます。現在の完成されたルクに於ては最初にヘリタツクリラ・ルクが踊られる、次にヘタツクリラツ (Hetzaki tet-tet) 手提をさせて踊る、及

びプロボボホ(Bluboboh—「並木」の意)と云はれる(二)の踊が踊られます。共に村の出来事とかルバタ(長老)へのオルダンガス(頌歌)と云ふ様なものを歌にして踊るのですが歌の詠踊の手によつて名稱を異にするのであります。これは多く坐つて一横坐りで足先を右に出します—踊られます。ですが持物は踊の手によつて持たれる事も持たれないことがあります。ヘタックルチツの時は往々道化のよう者が出ることがあります。是れはオレトイ方面の踊にある様に、皆の踊つてゐる中ばに一人の者が列から飛び出て道化の表情を示したり、或は歌の言葉にしたがつて舞の眞似をしたり、飛行機の飛ぶ眞似をしたりするのであります。斯うして一通り演じてしまふと最後に普通ヘルール・ハツア(Belair Hap—「ヤツカ島」の意)と云はれるオーレイヤイ邊の踊が勢よく幾つか踊られて終るのであります。

踊の装束としては色とりどりの褲を幾重にもかけること、昔は、現在オーレイヤイ邊の者が好んでやる様に、ヘママアル(「ひちひの類の織維で色とりどりの縦紐などを作つてつけたあります。それと手首、腕、膝上、踝、頸等をメヨルツ(椰子の新芽)でしばること、或はメヨルツの輪を頭にかけたり、襟にかけたりすること、花を頭髪にさすこと、昔はオシンヅ(楠)を飾つてさしたものであります。頭にかけ、頭に



ハ
テ
オ
の
踊
り

なく、變化も少ないものであります。が、低い聲で歌はれる歌にはどうしりとした重みがあり、何やら神前ででも歌はれる様な嚴かなものが度を流れています。ヤツブの踊は華やかであります。が何處か下品で居て俗っぽい所がありますが、バラオのルクには平素のバラオの人間のあまりない嚴謹な感じがあります。それは寧ろ不思議な位であります。平素の氣質から云ふとヤツブの方のが寡黙で素直ではあるが頑固で保守的であります。彼等の踊は陽気で華やかであります。(併し實の所を云ふとヤツブの踊の方はあまり澤山見て居りませんし、バラオで踊られるヤツブの踊と稱するものの中にはモクモクとかオレライ方面の踊が大分入ってゐるようありますから、ヤツブの踊に關しては言葉を控へませう)兎も角平素おつちよ

Digitized by srujanika@gmail.com

南洋群島における日本人本籍地別人口（1939年現在）

本籍地	人口(人)	本籍地	人口(人)
北海道	1,532	大阪府	189
青森県	283	兵庫県	255
岩手県	176	奈良県	80
宮城県	535	和歌山県	868
秋田県	292	鳥取県	114
山形県	1,959	島根県	83
福島県	3,684	岡山県	191
茨城県	442	広島県	405
栃木県	747	山口県	446
群馬県	243	徳島県	124
埼玉県	319	香川県	89
千葉県	512	愛媛県	347
東京都	4,484	高知県	327
神奈川県	754	福岡県	1,074
新潟県	651	佐賀県	375
富山県	147	長崎県	258
石川県	195	熊本県	859
福井県	232	大分県	310
山梨県	154	宮崎県	560
長野県	452	鹿児島県	2,517
岐阜県	103	沖縄県	45,701
静岡県	1,147	朝鮮	1,968
愛知県	364	台湾	3
三重県	383	樺太	48
滋賀県	110	総数	77,257
京都府	166		

[注]玉城美五郎「沖縄県人の海外移住発展史」「移住あっせん所案内」1966年、33頁

南洋群島における年次別住民別現住人口					
年次	住民	日本人 (人)	島民 (人)	外国人 (人)	総数 (人)
1920	大正9年	3,671	48,505	46	52,222
1921	大正10年	?	?	?	?
1922	大正11年	3,310	47,713	63	51,086
1923	大正12年	5,230	49,090	65	54,358
1924	大正13年	5,550	49,576	60	55,186
1925	大正14年	7,430	48,798	66	56,294
1926	大正15年	8,395	48,994	77	57,466
1927	昭和2年	9,979	48,761	76	58,816
1928	昭和3年	12,460	48,545	81	61,086
1929	昭和4年	16,202	48,617	102	64,921
1930	昭和5年	19,835	49,695	96	69,626
1931	昭和6年	22,889	50,038	100	73,027
1932	昭和7年	28,291	50,069	97	78,457
1933	昭和8年	32,214	49,935	103	82,252
1934	昭和9年	40,215	50,336	100	90,651
1935	昭和10年	51,861	50,573	103	102,537
1936	昭和11年	56,496	50,524	117	107,137
1937	昭和12年	62,305	50,849	123	113,277
1938	昭和13年	71,847	50,998	124	122,969
1939	昭和14年	77,257	51,723	124	129,404
1940	昭和15年	84,478	51,106	124	135,708
1941	昭和16年	90,072	51,089	98	141,259
1942	昭和17年	95,392	48,257	103	143,752
1943	昭和18年	96,670	52,197	105	148,972

[注]資料の出所:(1)南洋庁「南洋庁施政10年史」1932年、11~12頁。
(2)玉城善五郎「沖縄県人の海外移住發展史」「移住あつせん所案内」1966年、33頁。

(2) 玉城美五郎「沖縄県人の海外移住発展史」『移住あっせん所案内』1966年、33頁

※上記の二表は、「旧南洋群島における沖縄県出身移民に関する歴史地理学的研究」平成16年刊の「旧南洋群島における日本人移民・沖縄県出身移民史とその跡地調査」石川友紀著より転載しました。

1899年	明治32	明治31 西戦争、米国がスペインよりフィリピン群島を割譲。
1914年	大正3	第一次世界大戦勃発。 赤道以北のドイツ領南洋群島を日本軍が占領、軍政開始。
1918年	大正7	日本政府が統治形態を軍政から民政に移行。
1922年	大正11	太平洋委任統治諸島に関する日米条約調印。 パラオ諸島の「ロール島」に南洋庁、その他六か所に支庁を設置。
1923年	大正12	南洋興発(株)が砂糖製造業を開始。
1933年	昭和8	日本が南洋群島において同化政策を推進。 国際連盟脱退宣言。
1934年	昭和9	海軍省が南洋群島の宣伝映画「海の生命線」を製作し、全国で映写。
1935年	昭和10	島田啓二の漫画「冒険タノ吉」の連載開始。
1936年	昭和11	那覇—南洋直行船「北水丸」那覇に初入港。
1937年	昭和12	「南洋群島」創刊。
1939年	昭和14	二・二六事件。
1940年	昭和15	日中戦争勃発。
1941年	昭和16	官弊大社南洋神社創建。
1942年	昭和17	日米開戦。
1944年	昭和19	ミッドウェー海戦。
1945年	昭和20	米軍、トラック島空襲(2月)、パラオ群島空襲(3月)。 米軍、サイパンに上陸、参加兵士約四万人、民間人約一万人 千人が犠牲(7月)。 米軍、テニアン島に上陸、参加兵士約八千人が犠牲(8月)。 米軍、パラオ攻撃、パラオ諸島のアンガウルとペリリュー 両島で参加兵士の多数が犠牲(9月)。 東京大空襲(3月)。 米軍、沖縄上陸(4月)。 日本敗戦。

南洋群島

全26巻・別冊1 復刻版概要

●発行所 南洋協会南洋群島文部／南洋群島文化協会／南洋群島協会
●発行 第1巻第1号(昭和10年2月)～第9巻第10号(昭和18年12月)

●体裁 A5判・上製・総約10、300頁
●別冊 解説・総目次・索引

*別冊のみ分売可 1,000円+税 ISBN978-4-8350-6281-5

●解説者 仲程昌徳(前琉球大学法文学部教授)

●推薦者 石川友紀(琉球大学名誉教授)、今泉裕美子(法政大学教員)、須藤健一(国立民族学博物館館長)、山口洋兒(アジア太平洋資料室長)

●査定価 本体価格 416,000円+税

●配本 全6回配本

●原本提供 京都大学経済学部図書室、京都大学法学部図書室、

東京農業大学図書館、京都府立図書館、山口洋兒コレクション(社)アジア太平洋資料室所蔵本)、仲程昌徳氏蔵書、他



サイパン島民の防風小屋

▲2009年度配本○本体 208,000円+税

●配本一覧

配本	復刻版巻数	原誌巻数・原誌号数	原誌発行年月
第1回配本	第1巻	第1巻 第1号～第4号	1935年2月～5月
	第2巻	第1巻 第5号～第7号	1935年6月～8月
	第3巻	第1巻 第8号～第11号	1935年9月～12月
第2回配本	本体	48,000円+税	2009年6月刊行 ISBN978-4-8350-6281-5
	第4巻	第2巻 第2号～第5号 *2-1は未見	1936年2月～5月
	第5巻	第2巻 第6号～第8号	1936年6月～8月
	第6巻	第2巻 第9号～第12号	1936年9月～12月
	第7巻	第3巻 第1号～第2号	1937年1月～2月
	第8巻	第3巻 第3号～第6号	1937年3月～5月
第3回配本	本体	80,000円+税	2009年11月刊行 ISBN978-4-8350-6285-3
	第9巻	第3巻 第7号～第9号	1937年7月～9月
	第10巻	第3巻 第10号～第12号	1937年10月～12月
	第11巻	第4巻 第1号～第3号	1938年1月～3月
	第12巻	第4巻 第4号～第6号	1938年4月～6月
	第13巻	第4巻 第7号～第9号	1938年7月～9月
第4回配本	別冊	解説・総目次・索引	
	本体	80,000円+税	2010年2月刊行 ISBN978-4-8350-6291-4
	第14巻	第4巻 第10号～第12号	1938年10月～12月
	第15巻	第5巻 第1号、同付録、第2号	1939年1月～2月
	第16巻	第5巻 第3号、第5号～第7号 *5-4、5-8は未見	1939年3月～7月
	第17巻	第5巻 第9号～第12号	1939年9月～12月
第5回配本	第18巻	第6巻 第2号～第4号 *6-1は未見	1940年2月～4月
	本体	80,000円+税	2010年5月刊行 ISBN978-4-8350-6298-3
	第19巻	第6巻 第5号～第8号	1940年5月～8月
	第20巻	第6巻 第9号～第12号	1940年9月～12月
	第21巻	第7巻 第1号～第5号	1941年2月～8月
	第22巻	第7巻 第6号～第9号	1941年9月～12月
第6回配本	第23巻	第8巻 第1号～第5号	1942年1月～6月
	本体	80,000円+税	2010年9月刊行 ISBN978-4-8350-6304-1
	第24巻	第8巻 第6号～12月号	1942年7月～12月
	第25巻	第9巻 新年号～5月号	1943年1月～5月
	第26巻	第9巻 記念号(7月号)～第10号 *9-6は未見	1943年7月～12月
	本体	48,000円+税	2011年2月刊行 ISBN978-4-8350-6310-2

▲2010年度配本○本体 208,000円+税

*原誌の号数表記には、第〇号と〇月号の二通りの表記があるが、奥付表記のままでした。

不
出版

振替
〒113-0023
03-3803-3123
1603-3121
2-3-2-1
9-8-4-2
4-2-3-1
8-4-3-2
4-4-6-4

●表示価格はすべて税別。

【うるま新報】全6巻

[本体価格 168,000円+税]

【琉球新報】全27巻

[本体価格 756,000円+税]

【占領期・琉球諸島新聞集成】全16巻

[本体価格 448,000円+税]